
NARUHO堂
真淫忍道
ツナヒナ奴隷泡姫孕ませ地獄編
今日もこれから沢山のお客様と生ハメ種付けセックスです…。
誰が貴様の種などで孕むものか！いいだろう。。。ヤれるものならやってみろ！
基本シーン26
ＣＧ124枚+文字有

ペイン戦での傷跡が残る木の葉の里に
周到にも派兵をしていた雲隠れの里。
その初戦にてうずまきナルトが負傷してしまい、
五代目火影綱手は雲への休戦を提案。
雲は休戦には合意したものの、
その休戦条件は恐ろしいものだった・・・

1つ　木の葉に所属する女はすべて
雲隠れの男から性交渉を断ることを禁ずる。

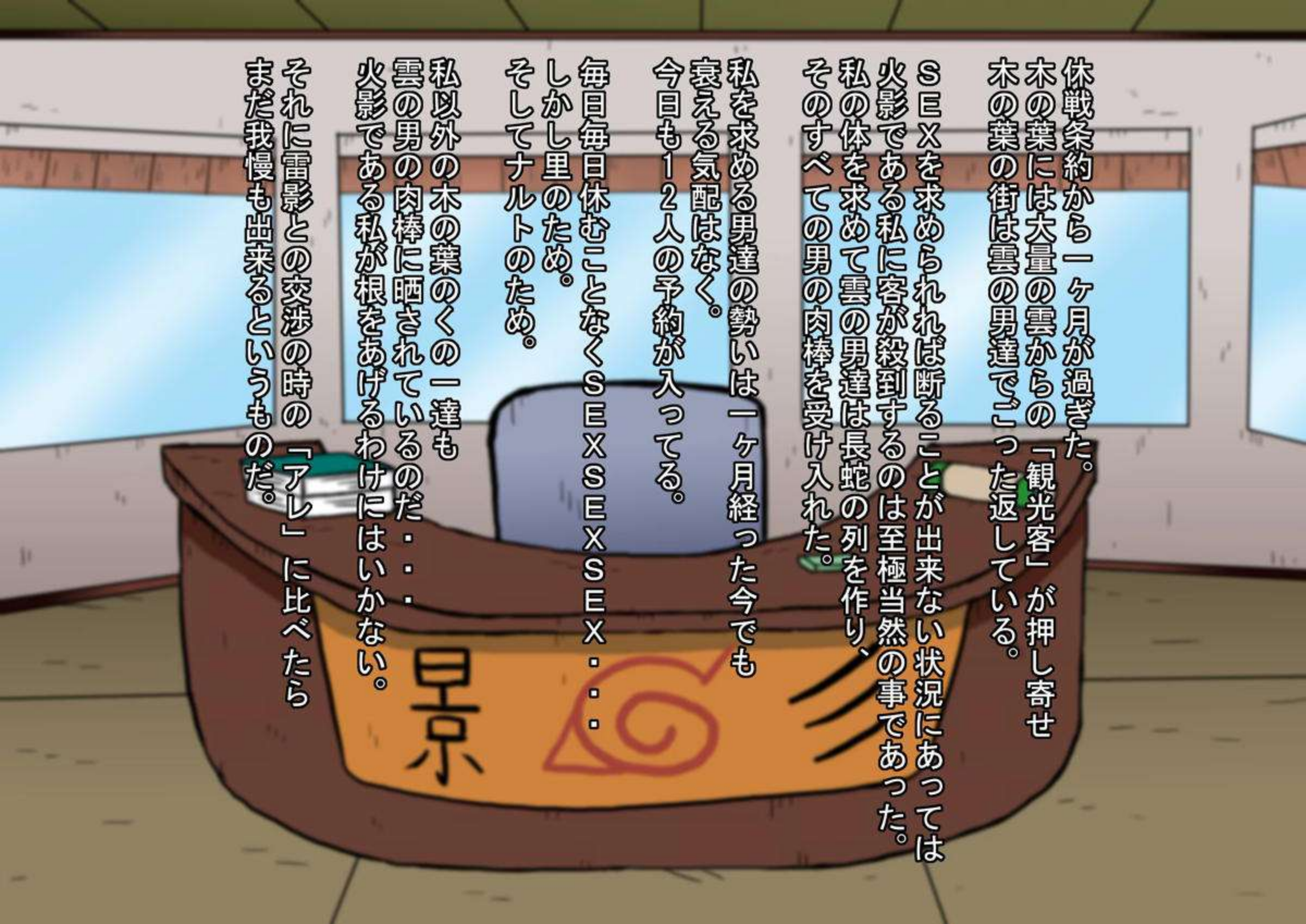
2つ　雲隠れの男とのＳＥＸでは
避妊薬や避妊具を使ってはならない。

3つ　休戦中に生まれた子供は雲隠れ所属とする。

恐らく木の葉の貴重な血統や血継限界を奪う目的なのだろう。

なんとか綱手による雷影への「交渉」が成功し、
いくつかの譲歩案が認められた。
子供や既婚者は除かれる事となり、
少ないながらも性行為における報酬が出ることになった。

そうして「木の葉くの一孕ませ風俗街」は誕生した。


休戦条約から一ヶ月が過ぎた。
木の葉には大量の雲からの「観光客」が押し寄せ
木の葉の街は雲の男達でごった返している。
ＳＥＸを求められれば断ることが出来ない状況にあっては
火影である私に客が殺到するのは至極当然の事であった。
私の体を求めて雲の男達は長蛇の列を作り、
そのすべての男の肉棒を受け入れた。
私を求める男達の勢いは一ヶ月経った今でも
衰える気配はなく。
今日も１２人の予約が入ってる。
毎日毎日休むことなくＳＥＸＳＥＸＳＥＸ・・・
しかし里のため。
そしてナルトのため。
私以外の木の葉のくの一達も
雲の男の肉棒に晒されているのだ・・・
火影である私が根をあげるわけにはいかない。
それに雷影との交渉の時の「アレ」に比べたら
まだ我慢も出来るというものだ。

「どうも～っ火影の綱手様居ますか～？」

見覚えの無い男が入ってくる

雲の観光客だろうか？

「なんだ貴様は？どこから入ってきた」

「ああっ大丈夫ッスよ秘書の方にもちゃんと声かけてきたんで」

「そういう問題ではない。ここは火影の執務室だぞ！観光客が入って良い場所じゃない！あくまで雲とは休戦中だ。無礼を働くと容赦せんぞ！」

「まあまあそう怒らないでくださいよ綱手様ぁ俺今日綱手様に予約入れてるPっつーもんですよ」

「予約だと・・・」

「ふむ・・・確かに名前はあるようだが、残念だったな
客を取るのは午後からというルールだ。まだ午後までは4時間ある
時間通りにくればちゃんと相手はしてやるから今は帰れ」

「そんな堅い事言わないでくださいよぉっほらこれ見てください！
もう暴発寸前なんですから！」

Pとか言う男の下半身は
服の上からでもギンギンに勃起しているのが分かるほどだった

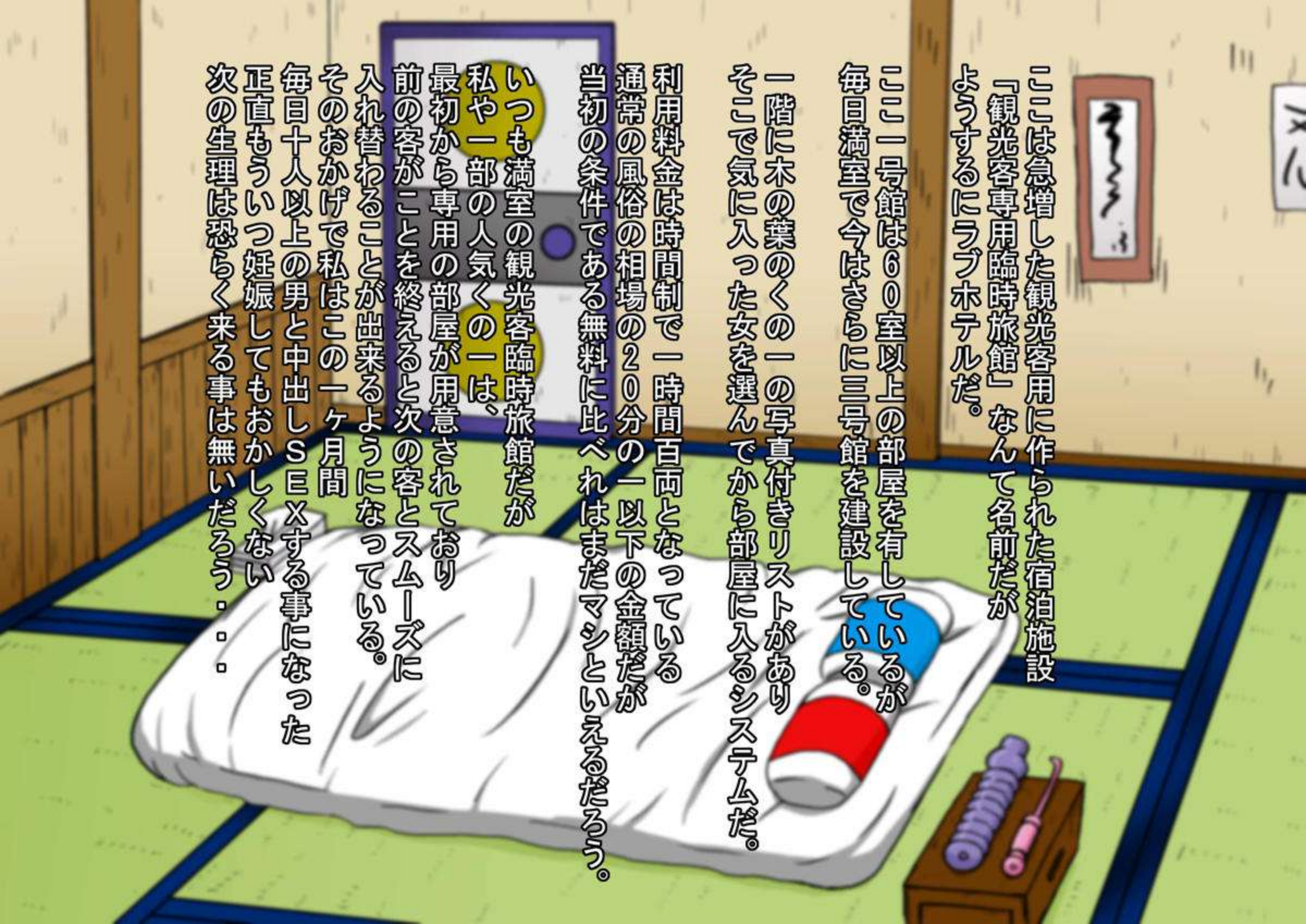
「いや～昨日の最後の客、あれ俺のダチでして火影様のデカパイを揉みしだきながら朝までハメまわしたなんて自慢してきやがるもんですからいても立ってもいられなくなりましてね～」

クソっあの遅漏の知人だったのか・・・あいつがなかなかイかないからこっちは寝不足だってのにこちらと言いたいわけか・・・まったく先に午後のみルールを破ったのは喋る時もずっと私の胸を凝視してるし嫌いなタイプだが・・・

「わかった。しかし今回きりだぞ。この部屋を汚されてはかなわんからなヤるのはいつもの臨時宿泊施設でだ。いいな」

「やったー！さすが綱手様！話がわかるう～」

こんなクソスケベ野郎にも股を開かんといかんとはな・・・まあいいどちらにせよ相手をする予定だったんだ少し時間が長くなっただけ・・・それだけだ


ここは急増した観光客用に作られた宿泊施設
「観光客専用臨時旅館」なんて名前だが
ようするにラブホテルだ。
ここ一号館は60室以上の部屋を有しているが
毎日満室で今はさらに三号館を建設している。
一階に木の葉のくの一の写真付きリストがあり
そこで気に入った女を選んでから部屋に入るシステムだ。
利用料金は時間制で一時間百両となっている
通常の風俗の相場の20分の一以下の金額だが
当初の条件である無料に比べればまだマシといえるだろう。
いつも満室の観光客臨時旅館だが
私や一部の人気くの一は、
最初から専用の部屋が用意されており
前の客がことを終えると次の客とスムーズに
入れ替わることが出来るようになっている。
そのおかげで私はこの一ヶ月間
毎日十人以上の男と中出しSEXする事になった
正直もういつ妊娠してもおかしくない
次の生理は恐らく来る事は無いだろう・・・

千手の血統である私を最優先で孕ますつもりなんだろうが
せめてコイツ以外の種で孕みたいもんだ。
「街中をよくもまあそんなにイチモツをおっ立てて歩けるものだな。この痴れ物が」
隣を歩いている私の身にもなれ。
まったくあれではこれからヤリまくりますと
街中にアピールしているようなもんじゃないか・・・まあ確かにヤリはするが
街中にアピールしているようなもんじゃないか・・・
「そんな事よりほらっ早くそんな服脱いじゃいましょうよ！」
「ええいっバカ者！わかっている！すぐに脱ぐから服を引っ張るな！」

「うわっエッロ！なんスか綱手様もそんなエロいの下に着てるなんてヤる気満々じゃないですかぁ～っ」

「フンッ貴様ら雲の男は部屋に入るなりすぐ乱暴に服を脱がそうとするからなＳＥＸの度に下着をやぶられてはかなわん。その対策だ」

「おおっ本当だかなり丈夫に出来てますねこれ伸びる伸びる」

「・・・・・」

「そんでこれが噂に聞く綱手様のデカパイかぁ～～っはぁ～マジデカイ！ちなみに何カップなんすか？」

「Kだ」

「K！あーっやべぇさらに立って来たもう早く綱手様のオマ○コ見たいんでこれ脱がしていいですか？」

「・・・好きにしろ』

ヤベェヤベェと言いながらPは私の足元から見上げるようなギンギンに勃起させたまま私のオマ〇コを食い入るようにこんなマヌケ姿の男とこの後合体するのかと思うと溜息が出る・・・

「一応確認するがお前の予約時間も合わせて今から4時間ちょっとだその間はどんな体位でも応じるし時間内であれば発射は無制限だ無論避妊の必要は無い好きなだけ中に出してくれていい」

嫌味を込めて事務的に対応してやったが特に気にしてもいやがらない

「こんな極上の肉体を好きに出来るなんて本当に感激ッスよ！」


野獣のような目でPがおっぱいを凝視している
どうやら最初はおっぱいから
責める気のようだ
はじめてあった時からスケベそうな顔して
ずっと私の胸見ていたからな
相当揉んで見たかったんだろう


Pはまず指で両方の乳首をつまみ弄り始めた
引っ張ったり胸の中に乳首を押し込んだり
色々と弄られている内にみるみる私の乳首硬くなり
硬くなった乳首を嬉しそうにまた弄られた
実を言うと私はその大きな胸に似合わず胸の感度が高く
正直このまま乳首をコリコリされているだけでも
イってしまいそうなのだ
なるべくコイツより先にはイきたくない・・・今は我慢だ


Pは胸を責める手を緩めずおっぱいに指がめり込むほど
強く激しく揉みしだきながらビンビンになった乳首を
こねくり回してくる
「あ～すげぇやわらけぇっこんな爆乳の女
今まで抱いた事ないっスよ！」
「べ・別に好きで大きくなったわけではない」
なんとかイクのはギリギリ我慢出来ているが
すでに私のオマ〇コはぐっちゃぐちゃに濡れていた


ま・まだおっぱいを弄るのかコイツは・・・
あんなにギンギンに勃起しているんだから
早く挿れたいだろうに・・・ぐうっ
「あれれっ苦しそうな声出しちゃって
もしかして乳首感じるんスか？」
「馬鹿を言うな。そんな力いっぱい揉みしだかれても
痛いだけだ」
かろうじて表情はキープ出来ているが徐々に
足に力が入らなくなってきている
胸が感じることがバレれば執拗に責めてくるに決まってる
ここはなんとしても耐えなければ・・・


「も・もうおっぱいはいいだろう
制限時間もあるんだし
そ・そろそろ一発抜いておいたらどうだ？」
「あーっそれもそうスっねあんまり良いおっぱいだから
つい夢中になっちまったっスじゃ一発目の特濃ザーメン全部飲んで貰っていいですか？」
「い・いいだろう・・・その粗末なモノを出してみろ」
なんとか虚勢を張っているもののコイツの愛撫によって
私のアソコから流れ出た愛液は
脚を伝ってすでに地面に染み込んでいた

しかし名前をPとか言ったかコイツ
大抵の雲の男は前戯も無しに突っ込んで来るものなのに
胸から入ったり一発目をしゃぶらせたりと変わったやつだな

まあいいこっちとしても
フェラチオは大歓迎だ妊娠の確率も
少しは減らせるしな

ふむ・・・まあ・・・デカイ・・・な
こんな凶悪なモノをこれから四時間近くハメられ続けるのか・・・
っといかんいかん
今はフェラに集中せんとな

まずPの亀頭をすっぽりと頬張り亀頭付近の恥垢を丁寧に舐めとってから
思い切りチ〇ポを吸い込みつつ一気に喉の奥までくわえ込み
口全体を使ってあえてジュバッジュバッと音を出しながら
激しくしごきまくってやった
さっきの礼だよ！死ぬほど気持ちよくしてやるからさっさとイキな！エロガキ！

百本以上のチンポをしゃぶって鍛えたフェラに
ものの数分で達してくれたのは良かったが
ドロッドロッの特濃灼熱ザーメン射精がいつまで経っても終わる気配が無いっ

「ん・・んんんっんんんんんんんっっ」

止め処なく発射されるザーメンをとにかく吐き出さないように
今出ている分のザーメンを、絶え間なくゴックンゴックン飲み続ける！
ま・まだ射精が終わらないのかいっコイツッ
飲んでる量と出される量が同じくらいなので呼吸する余裕すらない
どんだけ溜めて来れば、こんな小便みたいな射精出来るって言うんだよっ

「あ～デた出た久しぶり射精きんもちイイ～っ」

床に少しこぼしてしまったものなんとか吐き出さずには済んだがコイツのザーメンは本当に濃く、喉元にねばっこく絡みつき胃の中を蹂躙している。今すぐすべて吐き出したい衝動に駆られてしまうほどだ

「あれれ？まだ口の中に残ってますよ？せっかく綱手様のためにたっぷり溜めて来たんですからしっかり飲んでくださいよ！ほ～ら一気！一気！一気！」

クソ・・・コイツブッ殺してやりたい

「ど・どうだ全部飲みきったぞ！これで満足か？」

大量のザーメンを一気に飲み干しそう言って舌を突き出してやると

さすがは火影様！とPは笑ったが

本当にイライラさせてくれるヤツだ生理的に受け付けない

しかし一見チャラくて軽そうなヤツに見えるが

今の尋常ではない圧縮された精液の味と射精後に1ミリも萎えないチ○ポに

私はそこはかと無い恐怖を感じはじめていた・・・

た・頼むぞ私の卵子、こいつの精子だけは

受け入れないでくれ！

椅子に座るとPはヘソまで反り返ったチ○ポを指差して見せた

どうやらここに座れと言う意味のようだ

最初から悪趣味な体位だな・・・

やっぱりコイツの事に好きになれそうにない

感じている顔を見られたくないのでPに尻を向ける形でハメる事にした

私のオマ○コのすぐ下で我慢汁をほとばしらせながらPのデカチンがまだかとビクンビクンしている

あれからたくさんの男達の肉棒をくわえ込んで来たがこれほどのモノは珍しい……

正直全部入るか少し不安になってきた

「ちょっと綱手様焦らしプレイスか？
そろそろズブッとお願いしますよ～」

「わかっている今挿れるから黙っていろ」

遅かれ早かれ挿れる事になるのだ覚悟を決めるしかない
せめてコイツの種が当たりません様にと願いながら
私は勢いをつけて腰を下ろした

「んぐぐぐぐっうっうっ！」

スボオッとすごい音が鳴りPのチ〇ポが私の子宮を激しく貫く！
舐められないためにも根元まで挿入するつもりだったが
予想以上に深い所まで入ってこられて
つい逃げる様に腰を浮かせてしまう
こ・これはヤバイ完璧に雷影クラスのチ〇ポだ

「うひょ～っすんげぇ締まりっ
これ想像してたのより三倍はずこいッスよ！火影マ○コ最高！」

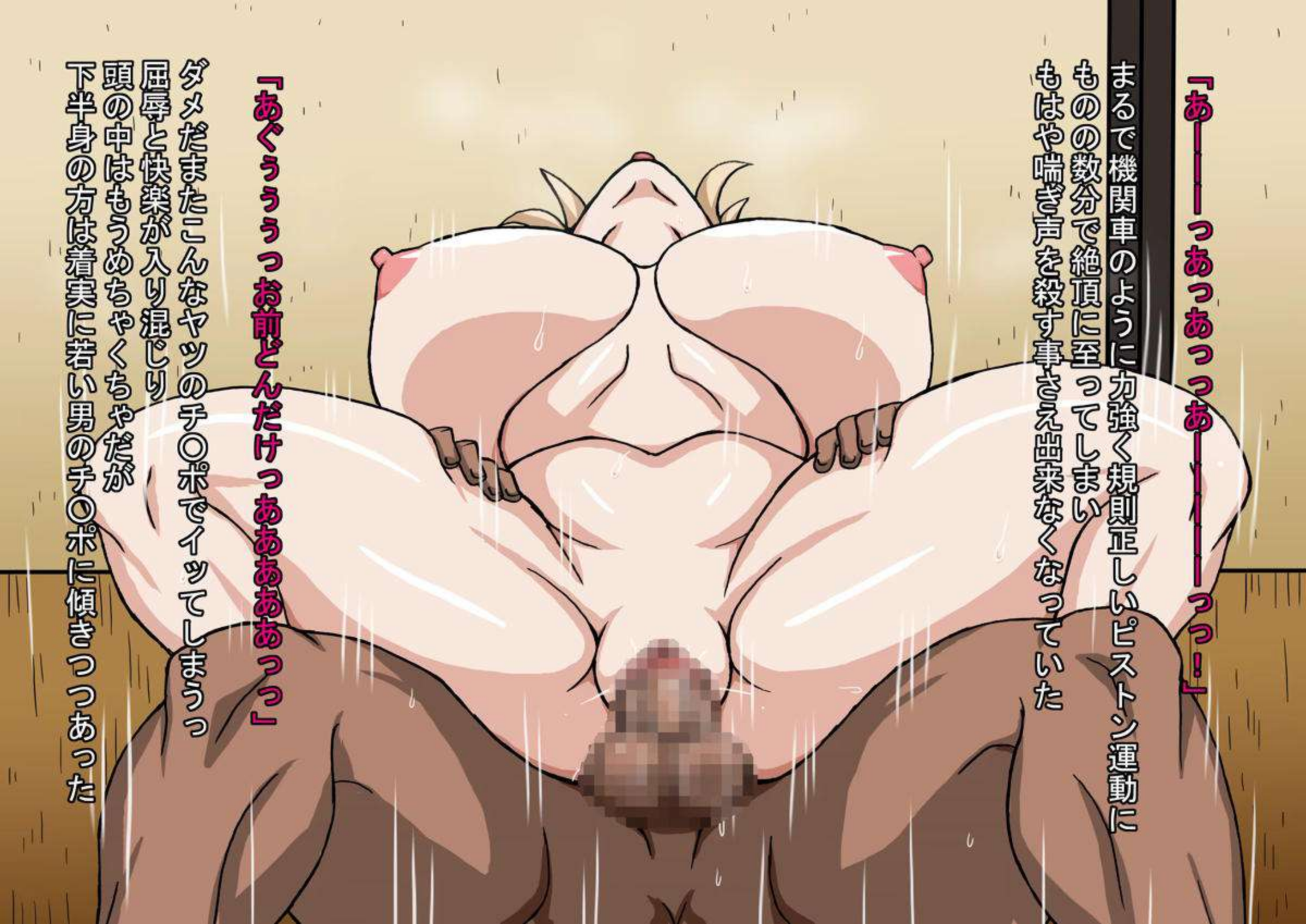
「う・うるさいいっんっいいからっハァッさっさと
イキやがれぇっっ」

ヤバイっコイツのチ○ポ超感じるうっ
クソっなんでよりにもよって
こんな顔も性格も嫌いなタイプが
体の相性だけ良いとか最悪だっ
とにかく今は少しでも早く終わらせるため
気力を振り絞り
全力で腰を振り続けて射精させるほかないっ

「あああつ熱いいいつ」

Pのマグマのような精液が膣内に発射される
ドックンドックンとザーメンを注がれながら私は
あの不味くて妙に粘り気のある精液の味を思い出していた


長い長い射精がようやく終わってくれた
あれだけの量を出したというのに
鉄のようにカチンカチンのチ○ポが栓のような役割になり
膣内は完全にPのザーメンで満たされ
下腹が少し膨らんでしまっていた
「お、おいもう出し終わったろ
とりあえず布団に移動しないか？」
「なに言ってんスか！自分まだ余裕ッスよ
よーしっ次は俺が動く番っスね！
俺が本気ピストンすると
女の子たまに気絶しちゃうんスけど
火影である綱手様なら大丈夫ですよね？」
「ま、待てせめて少し休んでから・・・」


「あ――っあっあ――――っっ！」
まるで機関車のように力強く規則正しいピストン運動に
ものの数分で絶頂に至ってしまい
もはや喘ぎ声を殺す事さえ出来なくなっていた
「あぐぅぅっお前どんだけっあああああっっ」
ダメだまたこんなヤツのチ○ポでイッてしまうっ
屈辱と快楽が入り混じり
頭の中はもうめちゃくちゃだが
下半身の方は着実に若い男のチ○ポに傾きつつあった


「綱手様俺の子生んでくださいっス！」
「おほおおおううううっっあっっ」
深々と突き刺さったチ〇ポの先から
また大量のザーメンが発射される
ピストン中も一度もチ〇ポは引き抜かれることは無く
パンパンになった子宮に
さらに注ぎ込まれた精液は逃げ場を失い
チ〇ポとオマ〇コのの隙間から
とめどなく溢れ出た・・・


ようやく椅子からは下ろして貰えたが
移動の時すらチ〇ポハメっぱなしと言う念の入れようだ
「貴様こんな事して一体どういうつもりだ」
「綱手様を孕ませられる千載一遇のチャンスなんですから
今日は最低十発はかましてやるつもりッスよ！」
じゅっ十発だと？普段なら冗談だろうと笑うだろうが
根元までズッポリと入っているチ〇ポの硬さから
コイツの言葉は冗談でない事を私が一番良く知っていた


会話をしている間もPは腰の動きを休めることは無く
一突きされる度にザーメンでタプタプになった
子宮の内部が波打つ
「た・頼むっあっも・もうこれ以上はっ」
「な～に火影が根をあげちゃってんスか！
俺だってこんな超具合の良いマ〇コ相手に
イクの我慢してるんスから綱手様も頑張って貰わないと」
くうっ火影がどうとか言われると
それ以上何も言えなくなってしまう
ああっでも今までに無いくらいの快楽の波が来るっ
来てしまうもう我慢が出来ないのにいいっ
あああああああああっ


内側をえぐるような苛烈なピストンに
とうとう我慢の限界を迎えた私は
プシャッーーッとハメられたまま
潮を吹き思いっきりイってしまった
火影をイカせた！とPが喜んでいるようだが
ほとんど耳に入ってこず
今はただ押し寄せる絶頂の波に
ビクンビクンと体を震わせる事しか出来ない・・・
しかしもちろんそんな私をPが気遣うワケも無く
イッたばかりで敏感になったオマ○コに
追い討ちをかけるようにチ○ポをねじ込まれて
結局Pの次の射精までに
7回以上の絶頂を迎える事となった

一時間後ようやく引き抜かれた時には
ドロドロに泡だった精液が一気に流れ出し
床一面に広がった

散々イかされて腰が砕けてしまった私は
火照った体を少しでも冷ますため深呼吸をする

「あーあーもったいない～せっかく出したのに
ほとんどこぼれちゃった」

「はぁ・・・はぁ・・・お前だって・・・っはぁっ
こんなに連続で射精するのはきついだろう・・・
何故私にここまで執着する？」

「そりゃもちろん伝説の三忍である綱手様に
憧れてるからですよ」

三忍？火影を犯してやりたいと言う男は多いが・・・

「俺実は昔中忍の頃に自来也様とやりあった事あるんスよ」

「自来也と？ハッ良く生きていたな」

「手加減してくれてたんスよ。こっちは殺す気で
上忍も含む小隊で挑んだんスけど3分も持たずに壊滅
しかも全員気絶してただけ、全然本気じゃなかったんス」

急にずっと半笑いだったPが真剣な顔付きになる

「だから俺そんな自来也様と肩を並べる綱手様の価値
誰よりもわかってるつもりッスよ・・・」

Pはまた勃起していた。

「今日一発で着床させるためにずっとオナ禁してたんスよ
その努力に免じて俺の子孕んで貰えませんかね？」

「バ・馬鹿を言うなお前の子なんぞごめんだよ！
大体一日何人相手にしていると思ってるんだい
ここで何発ヤった所でお前の子を孕む可能性なんて
ほとんどないだろうさ」

ニュプリと鬼頭の部分だけを入れたかと思うと
ゆっくり丁寧に鬼頭の先で膣壁をコンコンと突き始めた
たまに気持ち良いところに当たって声が出てしまうが
先ほどまでの荒々しいピストンに比べると少し物足りなく感じてしまう

「んっ・・・・・んん・・・・」

「は？」

「やっぱり今日一日じゃ無理ですよね次予約しても一ヶ月後だし・・・
でも俺高確率で綱手様を孕ます良い方を思いついたッス
綱手様俺の女になってくれませんか？」

「な・何を言って・・・正気かささっあうっっっ」

そう言いかけた所でPは腕の力を抜き
落下するような形でオマ〇コにチ〇ポが突き刺さり

私自身の体重でチ〇ポはさらにメリメリと奥に進入し
私の体はチ〇ポ一本で支えられている

「恋人同士なら予約なんてしなくても毎日ヤりまくれますからね！
これから綱手様がＹＥＳと言うまでずっと突きまくりますけど
もう綱手様の感じる所は大体把握したんで
降参するなら今のうちっスよ？」

「ふっふざけるな！女である前に私は木の葉の火影だぞっ
貴様ごときの粗チンをどれだけハメられようが
けっして屈するものか！」

そしてPと私の我慢比べが始まった
Pは私を放り投げるように上に浮かし落ちてきたところに
思いっきり腰を打ち付けるようにピストンをして来る
一突きする度にスボッとかグチョッとかすごい音がする

しかもピンポイントで私の感じる所を正確に突いて来るのだ
こんなの長く続けられたら死ぬほどイかされまくるに決まってる
しかしこの勢いずっと続くはずがない
いくら絶倫とは言え精液の貯蔵には限界があるはずだ

3時間後

「ううっうっっっうーーーっんんんっひぃっ」

Pの動きは衰えるどころかさらに早さを増し
激しい上下運動に胸は千切れんばかりに揺さぶられ
ビンビンのチ〇ポは元気いっぱい私の中をかき回し続けている

Pが一回射精するまでに私は十回以上イかされるのだ、まるで勝負にならない
もう下半身はとっくに白旗を上げ子宮口をパクパクさせて
Pのザーメンを欲しがっている
火影のプライドを失うのももう時間の問題のようだ・・・

「何時間待たすつもりだオラァッ」

しまった！もはや時間の感覚すら失ってしまっていて気がつかなかったが
とっくに13時は過ぎていて外で待っていた予約客が痺れを切らして
部屋に入ってきたのだ

「はぁ・・・はぁ・・・す・すまん、コイツの相手が長引いてしまってな
お・おい貴様チ〇ポを抜け！もう時間だ」

ずっぽりチ〇ポがハメられたままの結合部を見られるのは恥ずかしかったが
もう堕ちる寸前だった私はこの二人に少し感謝したい気持ちだった

「いや～お待たせしてすいません先輩
でも俺まだヤり足りないんでいっその事4Pしませんか？」

「なん・・・だと」


「あっあっあんっあんっあっ」
「うおっこいつはすげぇっここに来てから色んなくの一を抱いて来たがこのオマ○コは別格だぜっ」
まずは待たせてしまっていた二番目の予約客の相手をする
男は私の膣内をじっくり味わうように
ゆっくりチ○ポを前後し終わると
射精のためパンパンと腰を強く打ちつけはじめた
この男が私に膣内射精をする一部始終を二人の男に
すべて見られてしまうかと思うと
羞恥心でさらに股間が熱くなってしまう・・・


「散々待たせやがってこの！オラッなんとか言ってみろ！火影だからって調子に乗るなよメス豚がぁっ！」
「あうっあっす・すまなかったっあっあっな・なんでもするから許してくぇっ」
三番目の太めの客は待たされたイライラをチ〇ポに込めて私のオマ〇コにぶつけて来たその乱暴なピストンは内臓まで達しそうな勢いだしかし私の不手際で待たせてしまったのは事実なので下手に出るしかない


はぁ・・・やっと終わってくれた
二人とも待たされたせいで溜まっていたのか
いきなり抜かずに何発も中出しやがった
二人分の精液の混ざり合ったものが
膣からどめどなく流れ出る・・・
「先輩達休憩中みたいだし次俺の番でいいッスか？」
そう言いながらPは私の尻を揉みしだきながら
チ〇ポ擦りつれてくる
二人が休んでいる間にちゃっかりハメるつもりらしい
本当に脳にまで精液が詰まった精子脳野朗が・・・


ズブッとPのチ○ポがまた勢い良く入って来たんっ相変わらずの剛チンだが・・・なんだろう心なしかさっきよりも少し膨らんだような？長い時間出入りを続けたチ○ポだ嫌でも形をアソコが覚えてしまった
「どうスか？やっぱり俺のが一番でしょ？」
「んっんっんっお・お前っんっ何を言ってっんんっっ」
どうやら目の前で私が犯されているところを見て嫉妬し二人に対して闘争心を燃やしているようだ
別にお前の女になったわけでもないのにまるで浮気した女に「お仕置き」するかのように激しく腰を振って来る


悔しいが私の弱点を知り尽くしたPのピストンには
まるで抵抗できず
火影としての威厳も忘れアクメ顔を晒してしまう
「おほぅっあああああっわかったぁっあんっお前だ
お前が一番だっだからぁぁもう許してくれぇっっ」
プライドを捨て懇願する私に満足したのか
ほどなくしてPは私の中で果てた


「見せ付けてくれるじゃないのお二人さん
おげでもうビンビンだぜ」
「いや～すいません先輩つい熱くなっちまって（笑）
代わりますんで火影マ○コ先輩も楽しんでくださいっス」
「はぁ・・・はぁ・・・あ・ああ時間内は発射無制限・・・だ
玉が空になるまでブチまけていってくれ・・・」
Pがチ○ポを引き抜いてもまた数秒で新しいチン○が
私を犯す
しかしここで私が休憩でもしようものなら
まだ次のお客まで乱交に加わることになってしまう
ここは歯を食いしばっても耐えるしかないのだ


ぐうっ感じるうっ
二番目の男はかなりのテクニシャンで
突く時も前後左右に変化を付けたり
深く突き刺したまま腰を回して中をかき回したりと
色々にテクを使い私をよがらせて来る
どうやらコイツもPに対抗心を燃やしているようで
私がイッてビクビク痙攣しているのを確認すると
Pに向かって親指を立てて見せた
くそっコイツら本当に最低のクズどもだ
まるで女をオモチャみたいな扱いやがって・・・


絶え間ないセックスに次ぐセックスで
意識が朦朧とし息も絶え絶えな私にまた
いきり立った巨根が無慈悲に挿入される
太めの客は尻に痕が残るくらい力強く私の尻を掴み
グイグイ根元まで押し込んでくる
もうこれ以上ないってくらいみっちりチ○ポハメ込んだ後
太めの客は中の感触を味わいたいのか
そのままほとんど動かさない・・・
「お・おい・・・い・いやなんでもない」
バカな・・・何を考え居るんだ私は！
早く動いて欲しいと少しでも思ってしまうなんて
長時間の快楽地獄に頭が
少しおかしくなってしまったのかも知れない・・・


「オラオラ！犬畜生がっ！お前にはもったいねぇ
雪の処女まんこだぞー！オラー！」
「はっはんっはんっはんっはんっはんっ」
大柄の客の腰の動きは先ほどより更に加速し
とにかく激しく乱暴にバックからガンガン突きまくって来る
野生動物だってここまで激しく交尾はしないだろう
肉と肉がぶつかり合う音が部屋中に響き渡る
「パァンパァン雪の里の精液くれてやるー！おらっ！孕めー！」
「おおおお

最初は一人1・2発射精する毎に交代していたが
もはや順番など関係無しに
三人は奪い合うように私の穴と言う穴をむさぼり始めた
女一人に対して男三人の本格的な乱交ＳＥＸ・・・

「んぐっんんぐっぐっ」

「ちょっと綱手様あっそんな温い腰振りじゃ童貞だってイきませんよ？俺のザーメンが欲しいならもっと頑張って貰わないと」

とっくに限界を超え気力だけでしゃぶり、シコり腰を振っている私に無茶を言ってきやがる・・・でも確かに遅漏のPを騎上位でイかせるには・・・この程度のピストンでは足りないのは明白だ

最後の力を振り絞り汗だくになりながら
亀頭の先から根元まですべて包み込み
Pにオマ〇コ叩き付けるように高速で腰を振る
途中何度もイってしまったがせっかく上がってきた精子を
玉に戻さぬためイきながらも決して動くのを止めない
た・頼むどこの穴でもいいから三人とも早く射精してくれぇ
えええっ

「あ～たまんねぇ出る出る出るっ」

顔にザーメンをぶっかけられ
胃と膣同時に大量の精液を流し込まれる
気力だけで体を動かしていた私が
そのままPの上に倒れこんでしまいそうになると
Pは私の方に腕を出す、一瞬受け止めてくれるのかと
期待した私は本当に甘い・・・その手はジャンケンのチョキだったからだ

「よっしゃーっ勝ったぁ！俺このままオマ○コいただきッス！」

「しっかし信じらんねぇぜあの木の葉の火影が
俺のチ○ポしゃぶってるんだからなぁ」

「もう綱手様の全部の穴にチ○ポハメちゃいましたけど
ここが戦場だったら三人がかりでもブッ殺されるでしょうね（笑）」

「ちがいねぇ
まっ休戦が終わるまでは俺らの肉便器だけどな（笑）」

屈辱的な言葉を浴びせられても
チ○ポをしゃぶる手を止める事は許されない・・・
その通りだ、この部屋の中では
私は火影ではなく
ザーメンを注がれるだけの
ただの肉便器なのだ・・・

もう自分から動く事が出来なくなってしまった私の代わりに
Pが足首を固定し結合部丸出しの体位で下から突き上げている
Pの腹の上で跳ねる私はまるでロデオマシンの上に乗っているように
チ〇ポをしゃぶったまま、ひたすら上下に揺さぶられ続ける
ジュッポジュッポと
Pのモノが出入りする度
意識が飛びそうになるが
次のピストンが気付けになってしまうため
もはや気を失うことすら出来ない
これ以上イかさ続けたらさすがの私も
どうにかなってしまいそうだ

「うっ・・・ふう～ちゃんと尿道に残ったザーメンもしっかり吸い取って飲み干せよ火影さん」

「あああっ絞り取られるッス！はぁ・・・ほんとこのマ〇コ何発やってもヤり足りない超名器ッスね」

引き抜かれたチ〇ポはまだ硬いままだ
この絶倫さまるであの時の雷影を思い出させる・・・

「おまえもう何発目だよ（笑）そろそろオマ〇コ俺にもヤらせんか！」

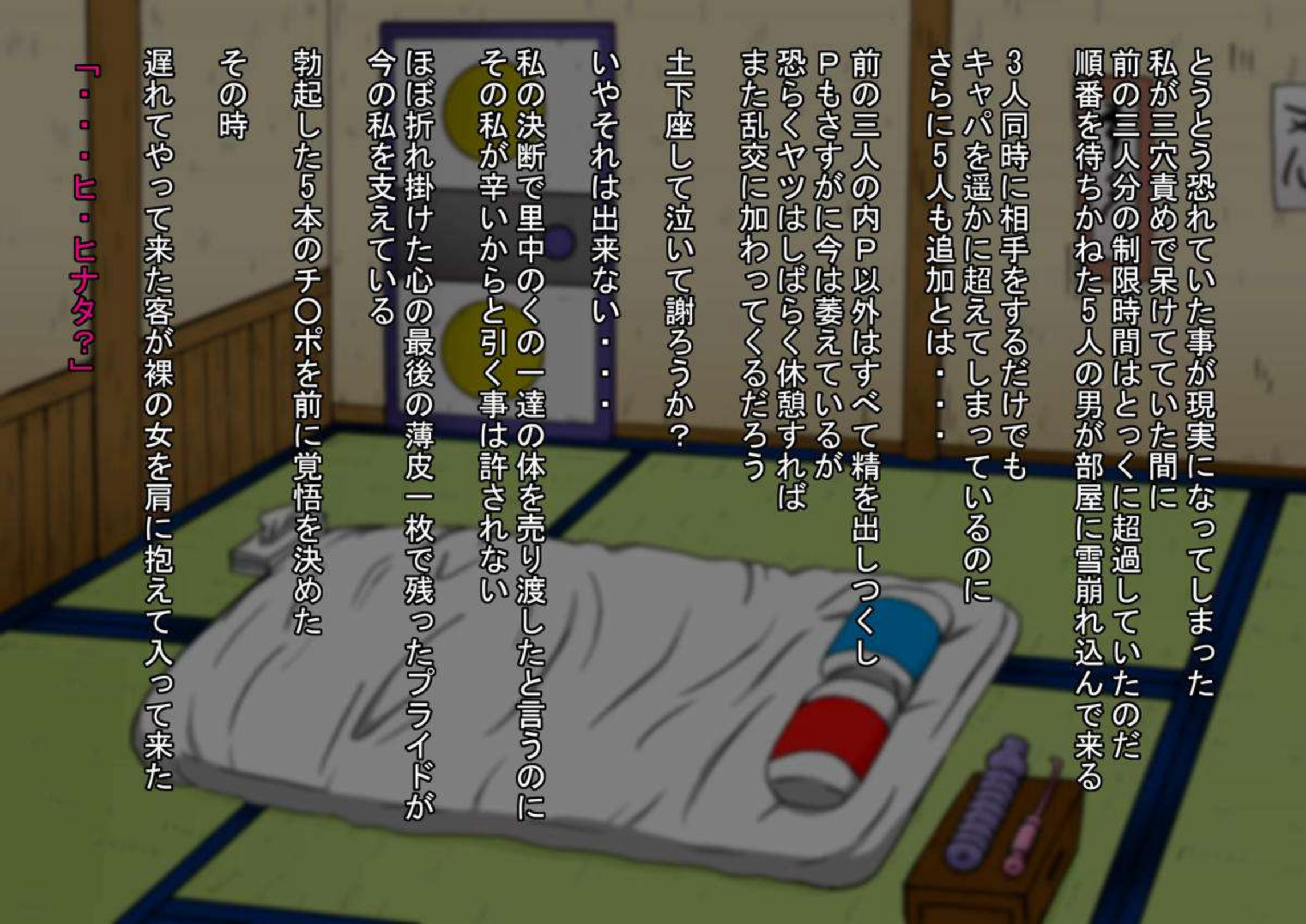
「はいはい了解ッス先輩じゃ次は・・・」

Pはまだ誰にも見せた事がなかった
ケツの穴の奥の奥まで
じっくり鑑賞すると
自らの精液を潤滑油変わりに
アナルに挿入して来た

敵里である木の葉の火影にチ〇ポを突き立てる事が
出来る事に喜び感じるのだろう
三人のサディスティクな感情がヤツらチ〇ポをさらに硬くしていく・・・
その後数時間の間ヤツらのチ〇ポが私の体の中に入っていない
瞬間は一秒すらなく

口。アナル。オマ〇コ。
すべての穴に挿入されたチ〇ポに
さまざまな角度で私の中の肉を
ねぶり蹂躙された

この時の私の叫ぶような
喘ぎ声は隣の建物にまで
響いていたそうだ


とうとう恐れていた事が現実になってしまった
私が三穴責めで呆けてていた間に
前の三人分の制限時間はとっくに超過していたのだ
順番を待ちかねた5人の男が部屋に雪崩れ込んで来る
3人同時に相手をするだけでも
キャパを遥かに超えてしまっているのに
さらに5人も追加とは・・・
前の三人の内P以外はすべて精を出しつくし
Pもさすがに今は萎えているが
恐らくヤツはしばらく休憩すれば
また乱交に加わってくるだろう
土下座して泣いて謝ろうか？
いやそれは出来ない・・・
私の決断で里中のくの一達の体を売り渡したと言うのに
その私が辛いからと引く事は許されない
ほぼ折れ掛けた心の最後の薄皮一枚で残ったプライドが
今の私を支えている
勃起した5本のチ〇ポを前に覚悟を決めた
その時
遅れてやって来た客が裸の女を肩に抱えて入って来た
「・・・ヒ・ヒナタ？」


「貴様ら私とヤりに来たんだろう？この娘は関係ない！」
「元はと言えば約束を破ったアンタが悪いんだろうがこの人数で輪姦するっつっても何人かあぶれちまうからな人数合わせに協力してもらったんだ本人も了解済みだぜ？」
「は・はいだからあの人に乱暴は・・・」
「わかってるってしかし敵里の万年下忍をかばうなんて本当にお人好しだな」
「待たせて本当に悪かった！どんな事でもする！全員が満足するまで何時間でも延長してかまわないから頼む・・・」
土下座をし男の足の指をペロペロ舐めながら懇願する私をヒナタは軽蔑するかもしれんがかまわない
私の不手際でこの子を巻き込むわけには・・・


「そうだなぁ・・・じゃ火影の公開オナニーショーでも見せて貰おうか？」
「はっそんな事くらいでいいのか」
すぐ近くにあったバイブを手に取り男達によく見えるように大股を開き右手でクリトリスを左手でバイブを挿入する
「んっ・・・んっ・・・んっ・・・んんっ」
男達が見守る中、ザメーンを潤滑油代わりにバイブを激しく出し入れして居ると一瞬ヒナタのチャクラが部屋を包み込む！・・・これは白眼？
私の痴態に夢中で雲の男達は気がついていないようだが・・・
「私は大丈夫ですから火影様・・・」
そういうとヒナタは男の前で跪き勃起したチ○ポの前で妖艶に微笑んだ・・・


ヒナタは二つの「玉」を同時に笑顔でほう張りながら
竿を優しくさすり始めたかと思うと
すぐさま男の背後に回り込み
一瞬の躊躇もなく男の肛門を舐め始めた
「ま・マジかよっコイツ！ケツの穴にドリルみたいに
グイグイ舌入れてきやがるぜ！」
男のモノが
ムクムクとさらに硬さを
増していく
男が限界まで勃起した事を
確認するとヒナタは
あえて男の股下を通り
まるで恋人の相手をするように
優しく・・・情熱的に
亀頭を舐める
その流れるような無駄の無い動きにみな目を奪われ
私もバイブを動かす手が止まってしまっていた


「ぐっっこ・こいつなんて吸い付きしてやがるっ
こりゃそうとうな好き物だぜ?この仕事忍より
向いてるんじゃないか?」
あえてブボッとかジュップジュップと
下品な音をたてながら
ヒナタは眉一つ動かす事無く
一心不乱にチ〇ポしゃぶりまくる
どうやらしゃぶるのに集中していて
外の音など聞こえていないようだ
そんなヒナタのフェラに男の方も
どんどん余裕を失っていく・・・


先ほどまで悪態をついて居た男は
ヒナタの極上フェラチオの前にもはや喋る余裕も無く
ほんの数分で果てた
ヒナタは口から溢れて
畳の上に飛び散った精液をすべてすすると
すぐに隣の男のチ〇ポに食らいついて行った
一見大人しげだったあの娘が
たった一ヶ月で一流の風俗嬢に成長していようとは・・・
恐らくこの一ヶ月で想像を絶する性体験を
してきたのだろう・・・


「はうっっはぁっあっあっあっそこ気持ちいいですうっ」
「んぁっぐっあっあああっやめっち・乳首感じるうっ」
私とヒナタを「味比べ」と順番に一発ずつ出しては
交代していく男達
私達は私達でお互いの負担を減らそうと
積極的に男に奉仕し精を抜き取ろうと奮闘していた


ヒナタと私の相手していた男達が同時に射精をする
今日何十回目が分からない膣内射精だ・・・
しかし休んでいる暇など無い
何故ならもうヒナタは
次の男の上に跨り腰を振り始めているからだ
無理やりやらされているSEXなのに
ヒナタは時折笑顔さえ見せ
男達の性欲をすべて受け入れている
そんなヒナタを見て私の折れかけていた心に火が灯る
木の葉を舐めるなよ雲の忍どもたとえ着床しようとも
絶対に全員のザーメンを一滴残らず搾り取ってやるからな！


木の葉ＶＳ雲のプライドを賭けたセックス戦争は
不覚にも私が強い絶頂後失神している間に
ヒナタの圧勝と言う形で決着していた
部屋中に飛び散った精液から相当ハードな戦いであった事が
うかがい知れる・・・
しかし私にだけはわかって居た
まだ勝負は終わっては居ない事が
「その様子じゃヒナタにはチ○ポ突っ込まなかったのかい？
年増の私なんかより若くてピチピチのあの娘の方がいいだろうに・・・」
「こう見えて俺結構一途な方なんスよ（笑）」
思えばヒナタを巻き込んだこの乱交騒ぎも
発端はコイツに敗れかけた私にある
最後の相手としては申し分ない
いいだろう・・・チ○ポで女をものに出来るなんてのは
小説の中だけだと教えてやる！

「うっ出る出るっくうっ・・・ふうっ
さすがの俺もこれで打ち止めっスよ」

「・・・・・」

「ひぇ～見てくださいよ入れ過ぎでチ○ポ
ふやけちゃってるし（笑）
こりゃあしばらく立ちそうにないけど
今日の夜までには精子溜めとくんで
待っててくださいね」

「おっとこれからは綱手様じゃなくて綱手か（笑）」

そう言ってPがチ〇ポを引き抜くと
コポオッと大量の精液が、突かれ過ぎて
開きっぱなしになったオマ〇コから溢れ出る
あれだけの男達が出していった精液をたった一人で
すべて上書きしていきやがった・・・

私が小便を何度も漏らすほどのあのおぞましいセックスの内容は
きっと私が死ぬまで誰にも語る事は無いだろう・・・

（後で知ったことだがPはこの日のために人体に害があるレベルの
精力剤を使用して居たらしい）

なあに大した事は無いさ
毎日10人以上の男を相手にしていたんだ
ただそれが毎日一人増えるだけ
ただそれだけの事だ・・・

END

木の葉の里が襲撃されてから一ヶ月・・・
綱手様のおかげでなんとか死者は
最小限で済んだものの休戦の条件として
私達くの一は雲の男の人の子供を孕むことになりました。

雲の男の人たちはとにかく性欲旺盛で
街で目が合ったくの一を、その場で手当たり次第に
犯しまくり、せめて室内でして欲しいと
臨時で専用の旅館が作られたほどです。

おかげで今は街を歩く女性もほとんど居ません。

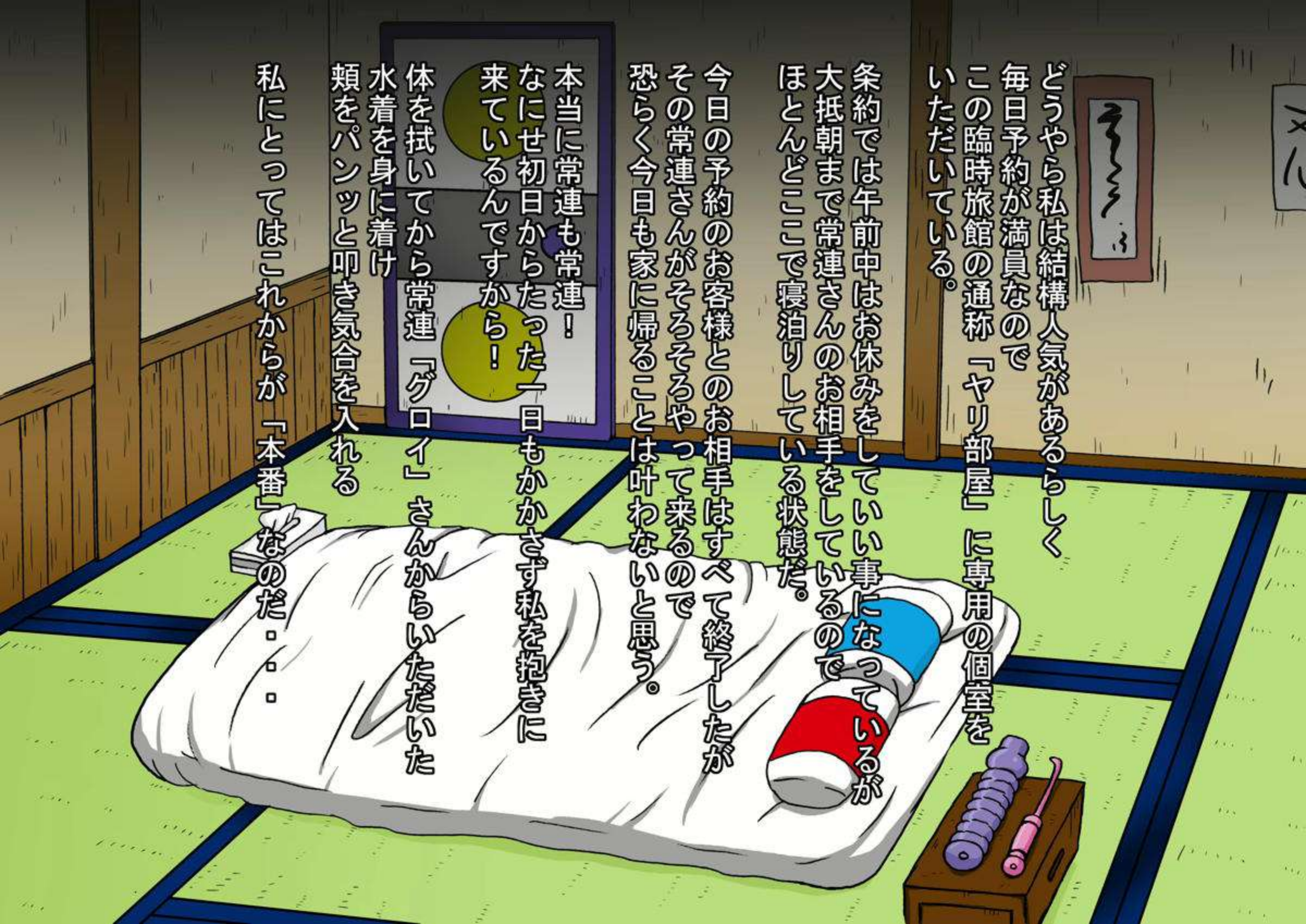
もちろん私も休戦条約が締結した初日から
たくさんの雲の男の人に
たっぷりと可愛がっていただきました。

初日はナルト君以外の男性のオチ〇ポを受け入れるのが
辛くて泣いてしまったりもしたけど
今はもう平気です。

だって私が頑張ってお客さんの相手をする事で
僅かだけど雲から復興支援金が提供される

それはつまりナルト君を助ける事に繋がるのだから・・・

今日もお客様のオチ〇ポは全部ナルト君のだと思って
全身全霊でご奉仕させていただきます！


どうやら私は結構人気があるらしく
毎日予約が満員なので
この臨時旅館の通称「ヤリ部屋」に専用の個室を
いただいている。
条約では午前中はお休みをしていい事になっているが
大抵朝まで常連さんのお相手をしているので
ほとんどここで寝泊りしている状態だ。
今日の予約のお客様とのお相手はすべて終了したが
その常連さんがそろそろやって来るので
恐らく今日も家に帰ることは叶わないと思う。
本当に常連も常連！
なにせ初日からたった一日もかかさず私を抱きに
来ているんですから！
体を拭いてから常連「グロイ」さんからいただいた
水着を身に着け
頬をパンッと叩き気合を入れる
私にとってはこれからが「本番」なのだ・・・

「ヒナた～ん！会いたかったよおっっ」

「フフフッ丁度十二時間振りですね」

この人が超常連で雲隠れの下忍のグロイさん！
ちょっと・・・その・・・見た目と体臭がきついせいで
雲の風俗嬢にも断られ続けたらしく
私とＳＥＸするまで童貞だったらしいです

最初は正直その見た目と体臭に引いてしまっていたけど
こんなに毎日来てくれると、なんだか愛着も少し沸いてきて
１時間分の料金で毎日朝までＳＥＸさせてしまってます

グロイさんはいつもたくさんＨな本などを持ってきてくれて
その本の通りのプレイをしたり
思いついたＨな事は私を使ってヤッてみないと気が済まないみたいで
他のお客様と違ってグロイさんの相手をするのは大変です

でもそんな毎日のグロイさんとの特訓（？）のおかげで
この一ヶ月間で私は風俗嬢として恥ずかしくないくらいの技術を
習得することが出来たのです

最後にセックスしてからまだ半日も経っていないと言うのに
数年振りに会った恋人とセックスするかのように興奮しているグロイさん
もちろん私が愛しているのはナルト君だけだけど
こうまで興奮してもらえると私も嬉しくなってしまいます

グロイさんは数秒で自分の服を脱ぎ去り
熱い口付けを交わす、進入してくる舌に私も舌を絡ませ応える

「ん・・・んっ・・・」

大量の唾液を私に流し込みながら右手でおっぱいを揉み左で尻を掴み
水着の中に手を入れると私の性器と肛門を刺激してくれます
毎回こんなにしっかり前戯してくれるなんて本当にグロイさんは紳士だなぁ

「ぷはっやっぱりヒナたんは最高ですな！そのエロ水着も超似合ってるよぉ」

「でもこれ丁度その・・・お尻の穴の辺りに穴が開いているから恥ずかしいです」

それが良いんじゃないか！と
グロイさんが私の後ろに回り込み
お尻の肉を広げる

肛門をジロジロ見られている
公開脱糞ショーを思い出し赤面してしまう
もう大抵の事には慣れてしまったけど
「アレ」だけはさすがに今でも恥ずかしいです
でもグロイさんあいうの大好きなんですよね・・・

「もうっそんなに乱暴に脱がしたらせっかくいただいた水着が破れちゃいますよ！」

「いいっていいってまたもつとエロ～いやつ買ってくるからさ！」

「もうっグロイさんったら」

さっきの水着より布面積が少なくなったらもはや全裸と変わらないのでは・・・

まあでも一切のＮＧ無しが私の売りなので頼まれればどんなものでも着ちゃいますけどね

「最初は何からはじめまか？お口ですか？それともおっぱいですか？
オマ〇コもう濡れてますよ」

もう男の人の勃起したオチ〇ポを見ているだけで
条件反射で濡れるようになってしまいました
今までこういう事した事がなかったから
気がつかなかったけど
私って結構Ｈな女の子なのかも？

「う～ん悩むなぁ昨日みたいなパイズリも良いけど
即ハメも気持ち言いし・・・」
グロイさんは考えしている間もおっぱいを
揉みまくる
毎日揉まれ過ぎてこの短期間ですこしサイズアップ
してしまったほどだ

「まあいいや悩んでる時間がもったいないし一発目はお口で抜いてよヒナたん（笑）」

そう言うとグロイさんはバッキバキに勃起したオチ○ポを私の鼻先まで近づける

お風呂嫌いのグロイさんのオチ○ポの匂いは凄まじく

慣れてきた今でも鼻にツーンと来る・・・

「それじゃグロイさんのオチ○ポ
いただきます
今日も美味しいザーメン
いっぱい飲ませてくださいね」

まずは裏筋の辺りから丁寧に心を込めて優しく舐め始める

はじめてしゃぶった時は恥垢を全部飲み込むのに苦労したっけ

そういえばあの頃はグロイさんのモノは皮（？）が被っていたけど

今は全部剥けてるなぁ・・・私と毎日頑張ってるせいなのかな？

「あ～～いいっ本当にうまくなったヒナたんっそうそうもっと吸い込んでうあっいいねっもっとと早く！あと玉のフォローも忘れちゃダメだよ？」

グロイさんの言う通りに全力でしゃぶり続ける白眼により性感帯を見抜ける私だがグロイさんをイかせるのはなかなかに骨だ

でもこうやって細かい所まで指導してくれるおかげで私のフェラテクは向上していくのだもっとうまくなっていつかナルト君のもしゃぶりたいな・・・

毎日大量のザーメンを飲まされているけど
グロイさんのザーメンは濃くて特に美味しいんです

ドビュっと口の中にグロイさんの濃厚ザーメンの味が広がる
男根に奉仕する事を仕事にしている今の私にとって
この味は勝利の味とも言える・・・・
すぐに飲んでしまうのは勿体無いのでしばらく舌に絡めてゆっくり味会う

「ふーっえがったぁ・・・
どう今日の一発目の味は？」

「は・はい量も多くて
とっても美味しいです
いつも私のために
貯めて来て下さって
ありがとうございます」

「なんのなんのだってオナニーするくらいだったらヒナたんに出したいからね（笑）」

他の風俗嬢に行かないでくれてありがとうと言う意味だったけどどうやらグロイさんにとっては私以外の選択肢はありえないようです
本当にグロイさんは私の事が大好きみたい
お前だけだなんて言われちゃうと私も期待に応えたくなっちゃう

射精し終わり精液まみれだったオチ○ポを綺麗にするためひたすら舐め続ける

脇の下だろうと肛門付近だろうとそこにザーメンが少しでもかかっているならすべて舐め尽す！

出されたザーメンは一滴だって無駄にしないのが私のポリシーなのだ

チュパチュパと赤子がお母さんのおっぱいを吸う様にオチ○ポを吸い
尿道にまだミルクが残っていないか吸って確かめるためだ
もうとっくに鬼頭の先までピッカピカに綺麗にしたが
グロイさんが止めと言うまでしゃぶりつづける
長い時は2～3時間しゃぶる時もあるが
私はおしゃぶりは大好きなので特に苦痛に感じた事はない
むしろ早く精液が飲みたくてウズウズしているくらいだ

「ううっあっも・もうやめていいよヒナたんっそれ以上やったら出ちゃうからね」

「ええ・・・そんなこと」こんなに頑張って舐めたのに」褒美ザーメン飲ませていただけないんですか？」

オチ〇ポピクピクしていたしそろそろ射精してくれそうだと期待していたのに・・・

どうやら今日のグロイさんはフェラよりセックスでイキたい気分のようだ

「グッフッフッじゃはじめはヒナたんから動いて貰っちゃおうかなヒナたんのスーパーエロスクワットマジ気持ちいいかんね～っ」

「は・はい！いつものやつですね」

そう言うとグロイさんは布団の上にゴロンと横になりビンビンのオチ○ポを見せ付けてきた

やっぱりグロイさんのは大きいなぁ
立ち上がっているのに私の股下すぐの所までそそり立ってるし
「ヒナたんまだ～？チ○ポ寒いんだけど？」
「あっすいません！今私のオマ○コで暖めてあげますらね！」
慌てて巨チンに向かって腰を下ろす

ヌボッと大きな音を立ててグロイさんの巨チンが私を貫く

「あ・・・あっすごいっ」

はじめの頃は半分入れるのも一苦労だったけど
今は根元まですべて包み込むことが出来る
とは言え元々穴が狭めの私のオマ〇コは
入り口は限界まで広がり
膣内はほんの少しの隙間もなく
みっちりチ〇ポが入った状態だ

でもこの完全フィットが癖になる
ほんの少し動いただけでも
「カリ」部分が膣壁を
激しく刺激するからだ

「うほおっこれこれっ
あ～柔らかくてぬちょぬちょで
やっぱりヒナたんのオマ〇コ
たまんねぇわ～っ
こんなの無限にヤれますわ（笑）」

ほんの少し動くだけでも体に電撃が走るように感じてしまう
毎日たくさんの人とセックスしているけれど
やっぱりこのオチ○ポは別格の相性だ

「も～じらさないでよヒナたんっ
いつもみたいにホラッゴリゴリやって」

いけないつい挿入の余韻に
ひたってしまってた・・・
私はプロなんだから
自分の事よりまずお客さんを
気持ち良くさせる事を
考えないと！

「そ・それじゃ行きますよ！
イきたくなったら遠慮泣く
中にいっぱい出してくださいね！」

忍として鍛えた体での全力ピストン運動！
あまりの上下スピードに出し入れする度に大量の愛液が弾け飛ぶ
一般のお客さんであれば私が本気で動けば一分と持たないのに
超遅漏のグロイさんだけは、なかなか射精してくれない
でもだからこそ私も長くセックスを楽しめるし
そういう意味でも私達の相性は完璧だった
最高に具合の良いマ○コ

Vs

超遅漏チ○ポ

もちろん毎日すべての精液を
抜ききっては居るものの
いつもギリギリの勝負で
ほんの少しの油断の許されない
ガチンコ種付けセックスを連日繰り広げています

「ヒナたんに出会うまでオナニーしかしてこなかったけどセックスってほんと最高だわ！あーきもちいいっ」

「んっあっあんっはいっわ・私もっあんっ気持ちいいです！」

私も子作りがこんなに気持ち良い事だなんて知らなかった

ゴリゴリと膣壁を削るオチ〇ポで事で

頭がいっぱいになってしまっています

「おおおっあっ出る出るヒナたんのマ○コにザーメン出すよ！
頼むから今日こそ孕んでよ！マジで！」

出そうだと聞いてイキそうなのを我慢して
さらに腰の上下運動をペースアップをする、ここが踏ん張りどころだ！

「は・はい孕みます！グロイさんの精子で孕ませてください！
っっっ」

私はもうとっくに孕む覚悟なんて出来ていて
もはや中出しされるのに一瞬の躊躇さえありません！
むしろ本気でグロイさんの子を生みたいと思っているくらい

「あああっ熱いいっ
グロイさんのザーメン
熱いよおおっ」

相変わらずすごい量の精液が
私の子宮にぶっかけられる
毎日たくさんの人の精液を子宮に
受け入れているけど
きっと孕むとしたらグロイさんの子
なんじゃないかな・・・
だってなんだかグロイさんの精子
元気良さそうなんだもん


「グフッじゃ次は頑張ったご褒美にヒナたんの好きな体位でハメてあげるね」
「やったぁ嬉しいです！ありがとうグロイさん！」
グロイさんの目の前で大きく股を開き、オマ〇コを露にしオチ〇ポが入れやすいように体勢を整える
この一ヶ月の間に私達はとっくに48手すべての体位を制覇しているけどその中でも私はやっぱりセックスの王道体位正常位が一番大好きでなのです


ズトン！とグロイさんが私の上に
遠慮なく圧し掛かる
「はうあっ・・・ああっ・・・すごいっ」
グロイさんの正常位は
少しでも奥にまで進入しようと
私の股間の辺りに全体重をかけるスタイルだ
一般の女性なら押し潰されるくらいの圧力だけど
私にはこの重さと肌の密着間が
とても心地良く感じる


「グフッこれからズッコンバッコンッ
ハメまくってあげるから覚悟してねっ」
「は・はいヒナマ〇コにいっぱいハメハメしてくださいね！」
入っているだけでもこんなに感じるのにこれから暴れ馬のように激しく犯してくれるのだ
期待と興奮でついつい笑顔がこぼれてしまう


「あんっあんっあんっあんっあんっあんっあああああっ
はぁっあんっあんっんあっあああああっあっあんっあんっ
あんっあんっあっあっあっあああああっひっあっあっあっ
あんっあんっあんっあんっあああんっっっっっっ」
「うぉおおおおおっホレ！ホレ！ホレ！
まだまだぁこんなもんじゃねーぞ！
！オラオラオラオラオラオラオラ！」
体重の乗ったグロイさんの猛烈な腰振りに
部屋全体が揺れているようだ
なるべくグロイさんと同時にイこうと
いつも我慢しているのだけど大好きな体位な事もあってか
もう何度もイかされてしまい
本気で喘ぎ過ぎて酸欠状態だ


汗だくになりながら舌を絡めあい
互いの性器をぶつけ合うその姿は
まるで恋人同士のセックスのようだった
「うぐぉっ出すぞヒナタァァァァッ」
「んひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ」
グロイさんの射精に合わせて私も本気絶頂を迎える
イッてる最中の膣内射精は本当に最高！


「はぁ・・・はぁ・・・す・すごかったですぅ・・・・」
「フヒヒッヒナたん途中何回もイちゃってたね（笑）
ビックンビックンしてるからすぐわかっちゃったよ
それにしてもボクの精液が逆流しているマ〇コってエッロいなぁ・・・あっまた勃ってきちゃった（笑）」
やだぁグロイさんたらもう
あんなに硬くしちゃってる
グロイさんは本当に
本当に底なしの性欲魔人さんです・・・


イッたばかりで身動きが取れない私の背後に回り込み
オチ○ポをズブリと滑り込ませてくる
「ま・待ってグロイさん少し休憩を・・・」
そんな言葉で
オチ○ポビンビンのグロイさんが
止まるわけもなく
バックから私のお尻を
ガンガン突きはじめた


30分間休み無く肉棒を突っ込まれ続け
トロトロにほぐされたオマ〇コの一番奥に
グロイさんのザーメンシャワーが何度も浴びせられる
「あああああああっイッちゃうううっ」
ほんと言うと後背位は
動物の交尾みたいで
好きではないのだけど
実際ヤられるとオマ〇コの
奥の方まで入って来て
すごく気持ち良いんです
癖になっちゃいそう・・・

連続射精で少し柔らかくなったかと思ったオチ○ポが
私の中でムクムクと大きくなっていく

「はうっはっあっあっすごいグロイさんっ」

「ヒナマ○コもすげぇよ！何発ヤッても中に入れてりゃまた硬くなっちまうんだからな！」


「あうっあうっんんんっあっあっあっあっっ」」
ピストン速度がまたどんどん加速していき
グロイさんデカチンが子宮口にガンガン突き刺さる！
「おふぅっはぁっあんっあっんぁっしゅごっしゅごいっ
またイかされちゃうぅぅぅっ」

「孕め！孕め！孕めえええっ」

「あひいいいいっっっっ」

グロイさんの私を孕ませようとする執念があっつ熱のザーメンから伝わって来る

「あんっ今出したばかりなのにまだグロイさんのオチ○ポビンビンですぅ」

先ほど話したと通りグロイさんの回復は早いこのまま抜かずの二回戦に突入したいようだ

さっき自分で放った精液が膣からこぼれない様にしながら
ギュッポッギュッポッと下から私を突き上げる
そこまでして私の子宮に精液を送り込みたいんだ・・・
グロイさんの情熱的なセックスにキュンキュンきちゃう

「ぐうっっ愛してるよヒナたんんんっ」

「あぐううううっっっっ」

中でグロイさんのオチ〇ポが跳ね上がり
また大量の精液が注がれる
本当にこれだけの量玉のどこに隠しているんだろうか。。。。

ただでさえ普通のお客さんよりも量が多いのに抜かずに連発されるとお腹の中はもう精液でパンパンだ

「はぁ・・・はぁ・・・うっ」

しかもまだ射精してるし・・・

お仕事だと割り切ってやっているセックスだけど、このオチ○ポだけは好きになってしまいそう・・・

「あっそっちは・・・お尻の・・・」

「やっぱりヒナたんの穴には全部射精してマーキングしとかなきゃね！」

グロイさんによってアナルの方もとっくに開発済みで先ほどのザーメンをローション代わりにするだけですぐにアナルセックスＯＫなのです

オマ〇コにはバイブで蓋をしてから
グロイさんはゆっくりと私のアナルを味会うように
ビストン運動を始めました

「んっんっやっお尻の穴も感じちゃううっ」

「うっしっしっしっ美少女のアナルをほじくるのって
マジ最高！ああっヒナたんのケツの穴暖かいよぉ（笑）」

「あああああああああっ
さらに快楽を求めるグロイさんは
膣壁越しの振動を楽しみながら
私のアナルの奥へ奥へとチ○ポを出し入れする
「っ」

「あ～これいいわ～ブルッブルッしてるっヒナたんは
「？どう
「っ・・こんなのっあっ良すぎてあっイキっもうイキそう
「っうですぅ

「あ――っイクイクイクッ
お尻の穴に射精されながら
イッちゃいますううううっっっ
直腸にもグロイさんの精液が
溢れるほど流し込まれる
「」

「ひぇ～アナルでもイッちゃうなんて
ヒナたんは変態さんだなぁ（笑）」
うう・・・ひどいグロイさんが
こんな体にした癖に・・・

深夜から始まった私とグロイさんのガチンコ種付けセックス
お互いにイッたりイカせたりしながら早朝を迎えましたが
まだまだようやく折り返し地点と言った所です

もちろん今もビンビンのグロイさんのオチ〇ポは
私のオマ〇コの中で元気いっぱい動き回っています

「はぁっはぁっはぁっあっあんっあんっあんっ
くううううっあっんっあんっそこっダメェっあっあっ」

仕事だけど・・・仕事なのにっ
ああっ感じちゃうっもう仕事だからセックスしているのか
気持ちいいからセックスしているのか分からなくなりそうっ

秒間3往復というグロイさんの高速ピストンに完璧にタイミングを合わせて
私も腰を押し付ける！その動きはまさに阿吽の呼吸

この一ヶ月でグロイさんとはまだたった300発程度しかしてしないのに
まるで30年近く連れ添った夫婦のセックスのように
一糸乱れぬピストン運動が出来るのはグロイさんの一突き一突きを
必死に研究した成果だと思います
グロイさんにも名人芸だって褒められちゃいました

「あああああっイクイクイクイクいっちゃいますぅ」

「ボ・ボクももう辛抱たまらんんんんっ」

子宮口に鈴口がキスした状態でグロイさんのオチ○ポが弾けドロッドロで新鮮な精液が満遍なく子宮内を満たす

あの動きは結構疲れるのでお互いに汗だくだくです

でも本当に気持ちよかった・・・

「っっっっっっ

そろそろ終わりの時間が近づき
最後の体位はまた正常位にしてくれた
なんだかんだグロイさんは優しい
いつものようにパカッと脚を広げて待っていると
亀頭の先でクリトリスをいじりながら
グロイさんがため息をつく

「ちぇっもう時間かぁ・・・
まだヤりたりないってのになぁ
まあいや最後はヒナたんが
孕むまで抜かない覚悟で
ヤりまくっちゃうぞ！」

「もうグロイさんったら
卵子の受精はタイミングもありますし
わかるのに時間かかるんですよ？」

私を孕ませることにこんなに
情熱を燃やして・・・
ほんと可愛い人

「ひゃうっあぁっやっぱりグロイさんのこれっあっ好きですうっ」

一撃でヘソの下まで侵入し
慣れた腰つきで軽快に腰を前後する

「んっんーんっあっあっはうっ
あっそこっそこもっとっあっ
そうそこですうっ
もっとガンガン突いてぇっあんっ」

他の人には恥ずかしくて言えないけど
相棒と言えるグロイさんにだけは
自分の気持ち良い所とか
遠慮なく言ってしまうんです

「ボ・ボク知ってんだヒナたんに
好きな男が居ること・・・
ヒナたんにとってボクなんてただの常連にすぎない事
でも・・・でも・・・ボクヒナたんが好きなんだぁぁぁっ」
そう告白するとグロイさんは泣きながら激しく射精した

あぁっ
思いは変わらないけれど
好きっていって言われると
やっぱり嬉しくなっちゃう
明日も・・・明後日も
私を孕ませるまで・・・
いや孕んだ後も
毎日来てんねグロイさん

興奮したグロイさんはもうそのままずーーっとハメっぱなしで
その後も休むことなく私を犯し続けました
半日後にはまたセックス出来るのに
まるで今日が最後の日のように
すべての精液を出し尽くすまで
この性交は終わる事はないのです・・・

「はぁ・・・はぁ・・・
きょ・今日も・・・いっぱい・・・」
いつもの事とは言えさすがに
抜かずの4連発はこたえてしまい
腰が抜けてしまいました
ほんと性に関してグロイさんは
上忍クラスです

「ふぅ～～～ッ出した出したぁ
それじゃまた夜までに
たっぷり溜めておくからね（笑）」
次のお客さんと鉢合わせしないように
そそくさとグロイさんは帰りました
12時間後までのしばしのお別れです

ドンッドンと扉を叩く音がする
どうやら次のお客さんがもう外で待っているようです
このお仕事はこうして私のお腹が大きくなるまで続きます・・・

ごめんね・・・ごめんねナルト君・・・
私ナルト君以外の男の人の子供を孕んでしまうだろうけど
絶対にナルト君の子供も生むからね・・・

END


景


景


京

























































































































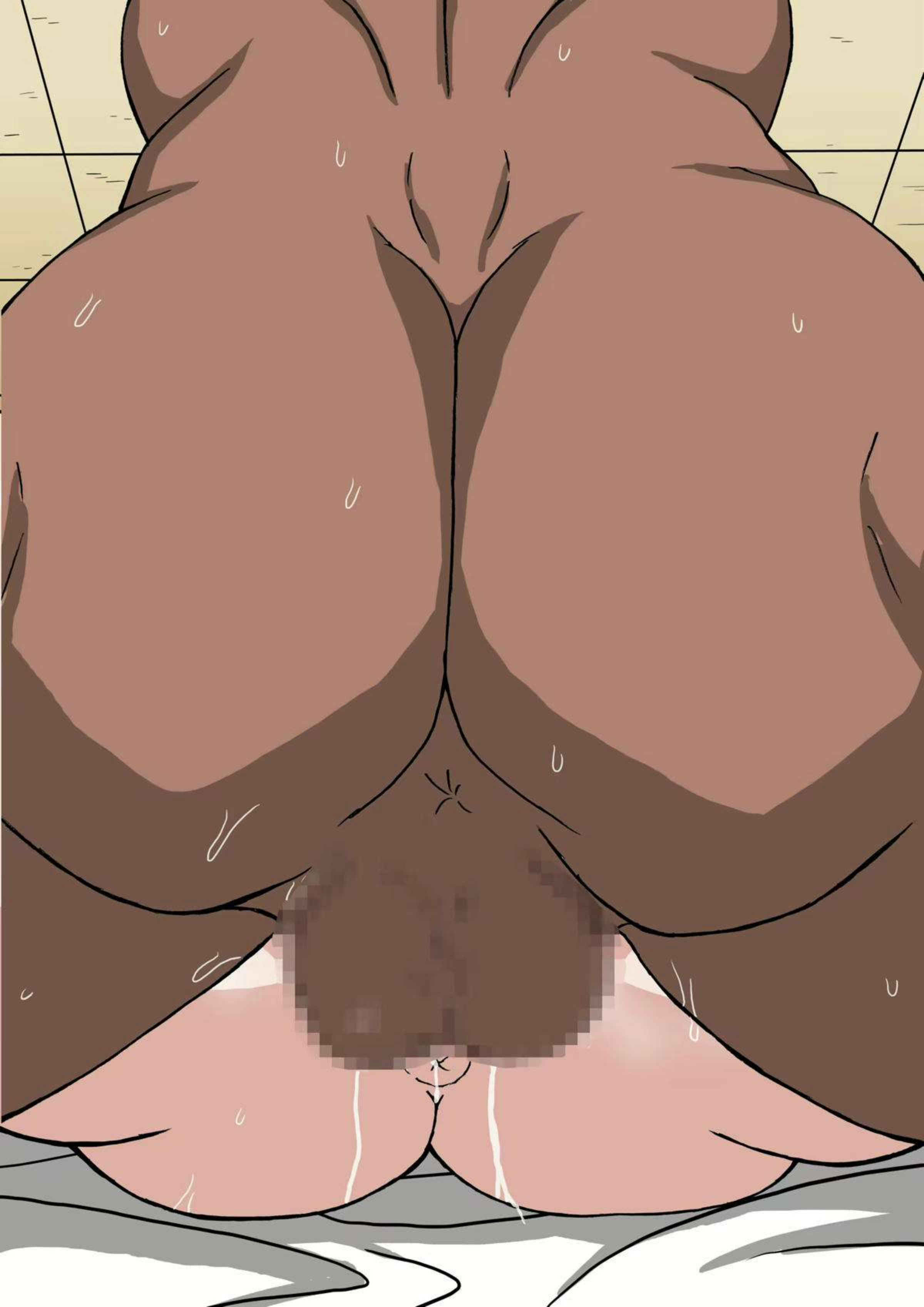














END

木の葉の里が襲撃されてから一ヶ月・・・
綱手様のおかげでなんとか死者は
最小限で済んだものの休戦の条件として
私達くの一は雲の男の人の子供を孕むことになりました。

雲の男の人たちはとにかく性欲旺盛で
街で目が合ったくの一を、その場で手当たり次第に
犯しまくり、せめて室内でして欲しいと
臨時で専用の旅館が作られたほどです。

おかげで今は街を歩く女性もほとんど居ません。

もちろん私も休戦条約が締結した初日から
たくさんの雲の男の人に
たっぷりと可愛がっていただきました。

初日はナルト君以外の男性のオチ〇ポを受け入れるのが
辛くて泣いてしまったりもしたけど
今はもう平気です。

だって私が頑張ってお客さんの相手をする事で
僅かだけど雲から復興支援金が提供される

それはつまりナルト君を助ける事に繋がるのだから・・・

今日もお客様のオチ〇ポは全部ナルト君のだと思って
全身全霊でご奉仕させていただきます！





















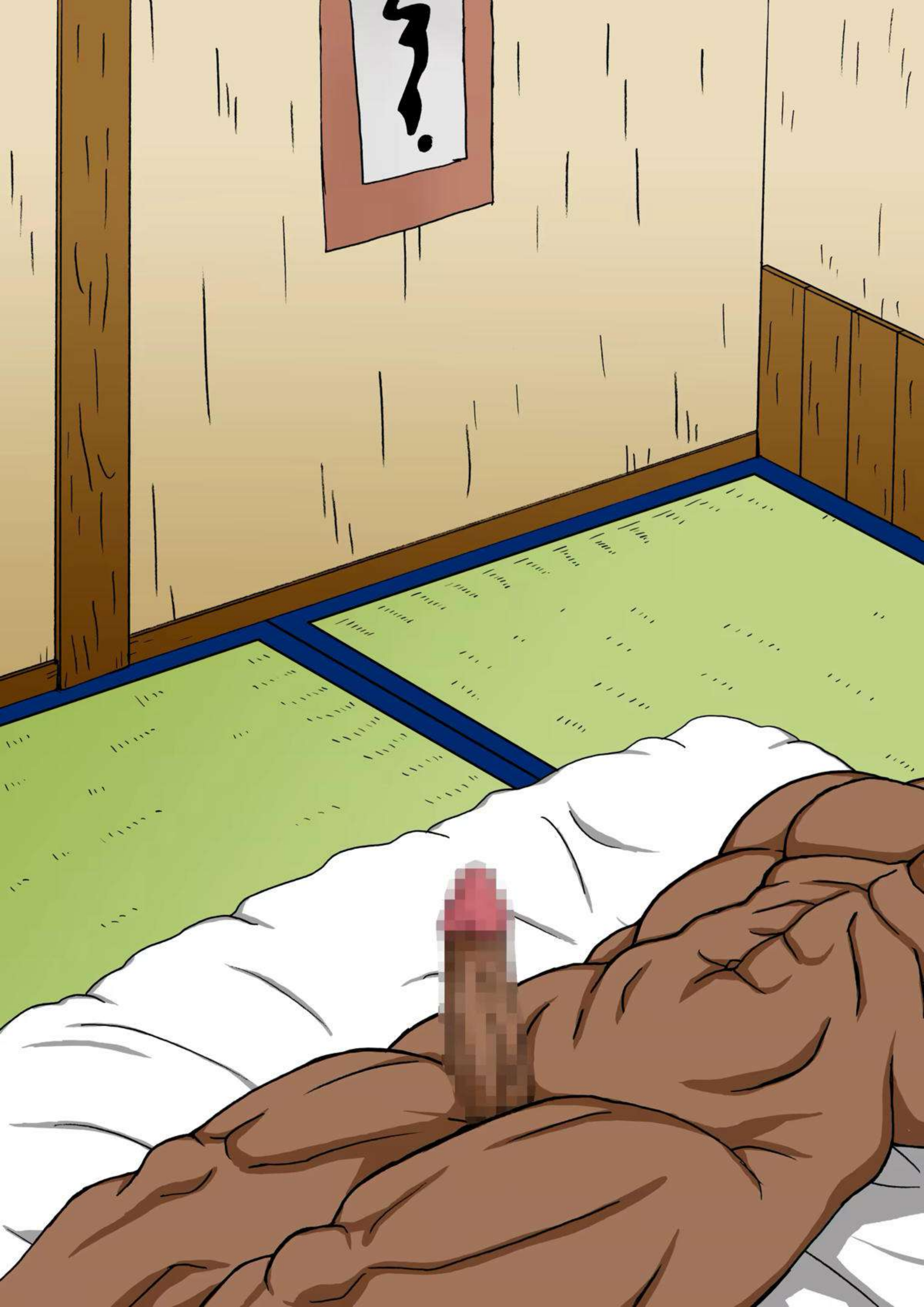




































































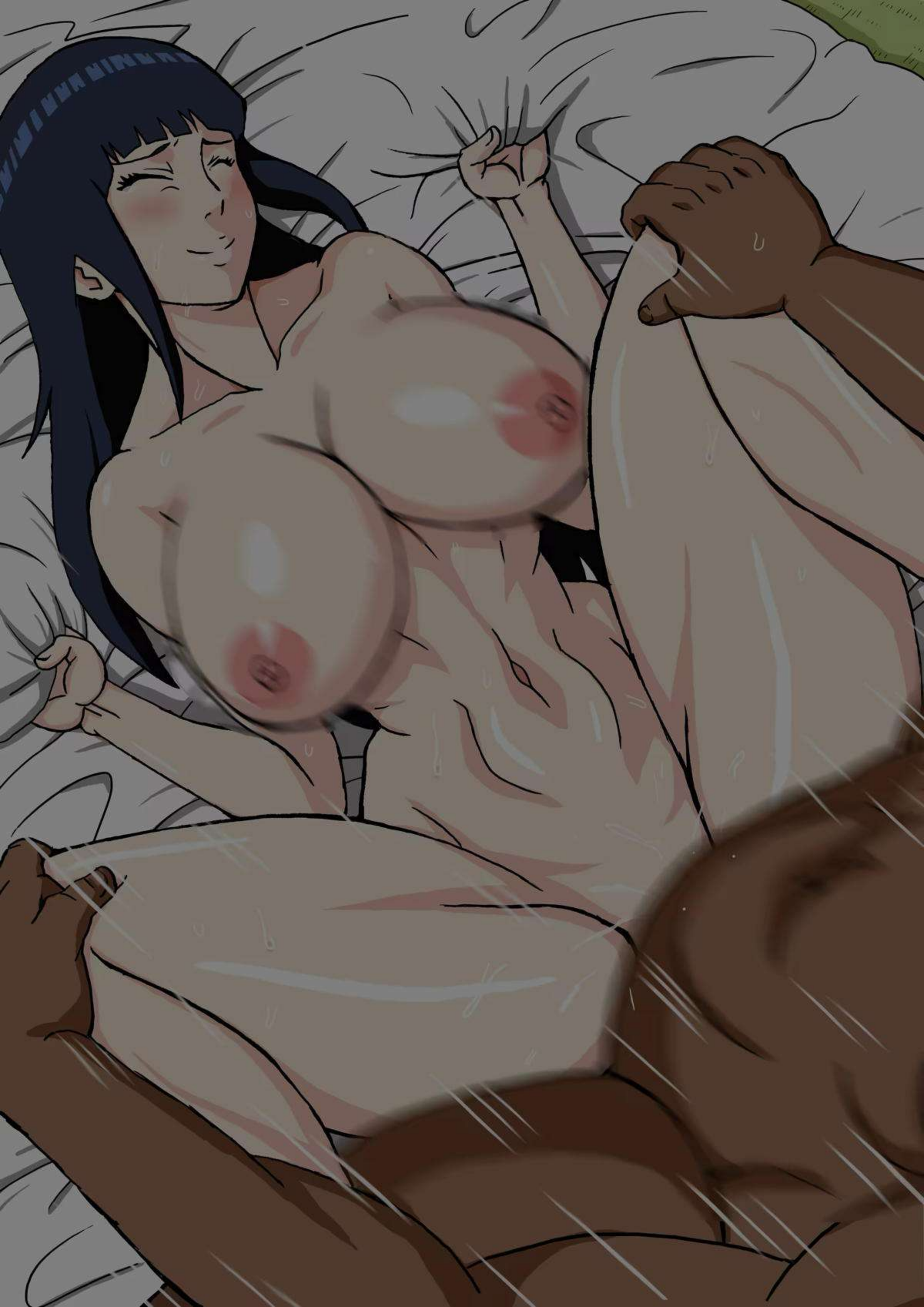















END